

# グローバルな消費のモードと接続する ローカルな生産・流通のモード

文  
小川さやか

共同研究【若手】● 現代消費文化に関する人類学的研究—モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して (2012-2014)

2012年10月に開始された本共同研究は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に着目して、現代的な消費文化に関する人類学的な研究の新たな可能性を提起することを目的としている。

これまでグローバル化現象を扱う数多の研究が、外国企業や援助機関とローカルな生産者とのあいだで生じる摩擦や係争を論じてきた。その要因は何より、グローバル市場における消費者の需要や開発潮流等に即した企業や援助機関の論理・実践が、ローカルな生産者の論理・実践と整合しないことにある。昨年度におこなわれたふたつの報告は、ローカルな生産者が、いかにしてフェアトレードに代表される倫理的消費のモードに接続していくのかを論じるものであった。本稿では、このふたつの報告を手掛かりに、企業や援助機関とローカルな生産者をつなぐ消費のあり方について考えてみたい。

## 倫理的消費のモードに接続する農民の道徳的世界

第1の報告は、箕曲在弘（東洋大学）による「『消費のモード』に接続される生産と流通—ラオス人民民主共和国におけるコーヒー生産地域の事例から」である。

フェアトレード・コーヒーは、生産者や労働者を不当に搾取する環境で生産された製品を避け、生産者や労働者の生計に配慮した製品を購入するという倫理的消費と呼び、新たな意味を付与された商品である。この倫理的消費のモードに当該地域の生産者の論理はいかに接続しているのだろうか。

箕曲は、ラオスのボラベン高原における農民の道徳的世界を「貰えるものは貰っておく（が返さない）」世界であると表現する。たとえば、農民たちは、小規模融資プロジェクトや仲買人からの貸与を積極的に獲得しようとするが、その際、後に生じる返済の義務については深く考えないし、実際に返



バスケットの生産の様子（2010年10月、ガーナ、ボルガタンガ州、牛久晴香撮影）。

済の不履行も多い。農民は、「カネがない自分たち」が、「カネがある人々」から金銭を譲り受けるのは当然だと説明する。

開発の推進者は、国際市場におけるラオスの位置づけやフェアトレードの理念、先進諸国の消費者の要求（高品質／安心・安全／アカウンタビリティ等）に応じた多様な施策（品種変更や協同組合の再編、買取り方法の考案、商標の作成等）を講じる。だが、農民たちはそれらの施策の意義を理解しても、その実現プロセスには納得することができない。

たとえば、開発コンサルタントによる「品質を向上させれば、高値がつく」との説得に「買値を上げてくれば、品質を向上させる」と返答する農民の行為は、「先に貰えるものは貰うが、その後のことはわからない」という農民の論理をよく表わすものである。農民にとって、新しい倫理的消費のモードに乗じようとする政府や開発機関の試みとは、持たざる側（農民）が持てる側（開発機関や政府、先進諸国の消費者）に先に品質の高い産物やそのための労働力を与え、後から持てる側がそれに報いる（かもしれない）という、持たざる者と持てる者との「貰う—与える」の順序が逆転したプロセスになっているのである。

これらを総括し、箕曲はR・ウィルクの「差異の共通構造（common structure of difference）の議論」（Wilk 1995）を参照しながら、ローカルなものをグローバル経済における特定の構造に当てはめることでその優位性を高める方途は、グローバル経済の論理とローカルな実践の論理の不整合を存続させたまま、ローカルな実践をグローバル経済に接続するものであり、結果としてその構造自体に揺らぎを生じさせるものであると論じる。

## グローバル市場と生産者をつなぐ仲介者

第2の報告は、牛久晴香（京都大学）による「アフリカ農村と先進諸国市場をつなぐ仲介者」である。ガーナ北部では、1990年代以降、様々な理念を掲げた開発団体や企業が押し寄



先進諸国でのガーナ産バスケットの販売の様子（2013年4月、東京都、牛久晴香撮影）。

せるようになった。州都ボルガタンガ周辺ではバスケット産業が振興され、2009年には輸出額160万米ドル、輸出量300トンを超える地場産業へと成長した。

しかし「今年の春夏コレクション」や「デザイン性の高いフェアトレード品」「天然素材の手づくり雑貨」といった先進諸国の消費者の需要は、納期や品質・規格において厳しい労働条件を現地の生産者に課すことになる。

牛久は、ボルガタンガにおけるバスケット生産は、農作業の合間におしゃべりしながら編むような「気ままな」仕事にみえるという。大多数の編み手は生計多様化戦略を採用しており、専門化しない。編み手は、他の生計活動との兼ね合いや現金の必要性に応じてバスケット生産に関わるため、各編み手の生産個数や労働力の投下にはばらつきがみられる。このような編み手の「気ままな」生産への関わり方と先進諸国の消費者の需要に対応した企業活動はいかにして両立可能か。

現在、牛久が調査しているN村の生産者には、3種類の販路がある。第1の、組織化による社会的弱者のエンパワメントを目指す手工芸協会NCSは、登録した編み手をグループ化し、技能レベルに応じた分業体制と技能伝達の仕組みを築くこと

を通じて、斬新なデザインの商品を調達する戦略を採用する。第2の、米国のフェアトレード企業FCの戦略は、定番商品に意図的に高値をつけ、それにより高品質かつ寸法の揃った製品を大量に集めることにある。第3の、地元の個人経営の仲買商人は、臨機応変な値段交渉を通じ、いかなる商品でも買い取ることで、低コストで多様な商品を集めることでニッチを獲得している。

多様な販路の存在は、バスケット生産やそれに関わる技能習得に対するモチベーションや参与形態の異なる生産者たちが、それぞれの都合を優先させながら、同産業に参入することを可能としている。しかし先進諸国での商戦に合わせた納期は農繁期と重なるため、企業はしばしば納期までに商品を揃えることが困難な事態に陥る。

ここで活躍するのが企業から集荷を請け負う地元住民である。彼らは、編み手の生活リズムを尊重し、一か八かの集荷作戦を企業に承服させたり、各編み手の性格や能力を見極めながら、編み手に「頼りにされる喜び」や集荷人に対する「同情／感謝の念」を喚起することで、無理な注文を納得させる。

牛久は、これらをまとめ、同産業の発展の鍵を握ってきたのは、この集荷人であると指摘する。彼らは地域社会が市場に編入される際のバッファーとなりながら、企業や消費者の要求を生産者に伝え直す、インターフェイスとしてのミドルマンなのである。



倉庫に搬入されるコーヒー（2014年2月、ラオス、ボランベン高原、箕曲在弘撮影）。

## オルタナティブな消費の複数性

市場の論理とローカルな論理との拮抗を扱う研究はこれまで、信用供与や買取価格、納期等に対して道徳的な配慮を求める生産者の要求と、資本主義経済への対応とのあいだでジレンマを抱えるミドルマン像を提示してきた（cf. Evers 1994）。箕曲が論じるように、グローバルな倫理的消費とローカルな生産者の論理にはずれがあり、両者をつなごうとする開発団体や組合は、しばしば困難に直面する。

では、牛久が注目した集荷人が生産者と企業の要求を調整しているのはなぜだろうか。様々な要因が考えられるが、その重要なひとつは、ガーナ北部には異なる理念を掲げた企業・NGO—複数の「グローバル」—と多様な目的・技能・形態の生産者たち—複数の「ローカル」—が存在することである。

N村の集荷人たちの企業・団体に対する交渉力は、同地に活動理念・目的の異なる複数の企業・仲買人が存在しており、グローバルな市場に連結する経路が多様であることによって担保されている。集荷人の生産者に対する交渉力は、そうした経路の多様性が生産者の多様性を温存し、企業の注文に応じて動員する人々を選択できることに依

拠する。だが、そもそも接続経路や方途の多様性は、接続先のグローバル市場の各消費者が「倫理的消費」を含めた消費全体に関して多様な考え方や態度を示し、実際には複数の消費のモードが淘汰されずに併存していることによって創出・維持されているものである。このように考えてみると、オルタナティブなグローバルとローカルの接続の鍵を握るのは、複数の消費のモードを創造しうる私たち消費者の多様性かもしれないと思えるのだ。

### 【参考文献】

- Evers, H-D. and H. Schrader (eds.) 1994 *The Moral Economy of Trade: Ethnicity and Developing Markets*, pp. 7-14. London: Routledge.  
Wilk, R. 1995. Learning to be local in Belize: Global Systems of Common Difference. In: D. Miller (ed.) *World Apart: Modernity through the Prism of the Local*, pp. 110-133. London & New York: Routledge.

### おがわ さやか

立命館大学先端総合学術研究科准教授。専門は文化人類学。論文に「タンザニア市場における中古衣料品とアジア製衣料品の競合—トランス・ナショナルなインフォーマル交易の台頭に注目して」（小島道一編『国際リユースと発展途上国』アジア経済研究所 近刊）など。著書『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』（世界思想社 2011年）が、第33回サントリー学芸賞を受賞。